白紙の散乱

尾崎 豊

白紙の散乱

尾崎 豊

白紙の散乱

1992年2月29日　初版発行
1992年5月15日　再版発行

著者――――尾崎 豊
発行者――――角川春樹
発行所――――株式会社 角川書店
〒102 東京都千代田区富士見2-13-3
振替 東京3-195208
Phone: 営業部▶03-3817-8521
編集部▶03-3817-8451
印刷所――――大日本印刷株式会社
製本所――――株式会社 鈴木製本所

●定価はカバーに明記してあります。
●落丁・乱丁本はご面倒でも小社通信販売課宛に
お送り下さい。送料は小社負担でお取り替えいたします。

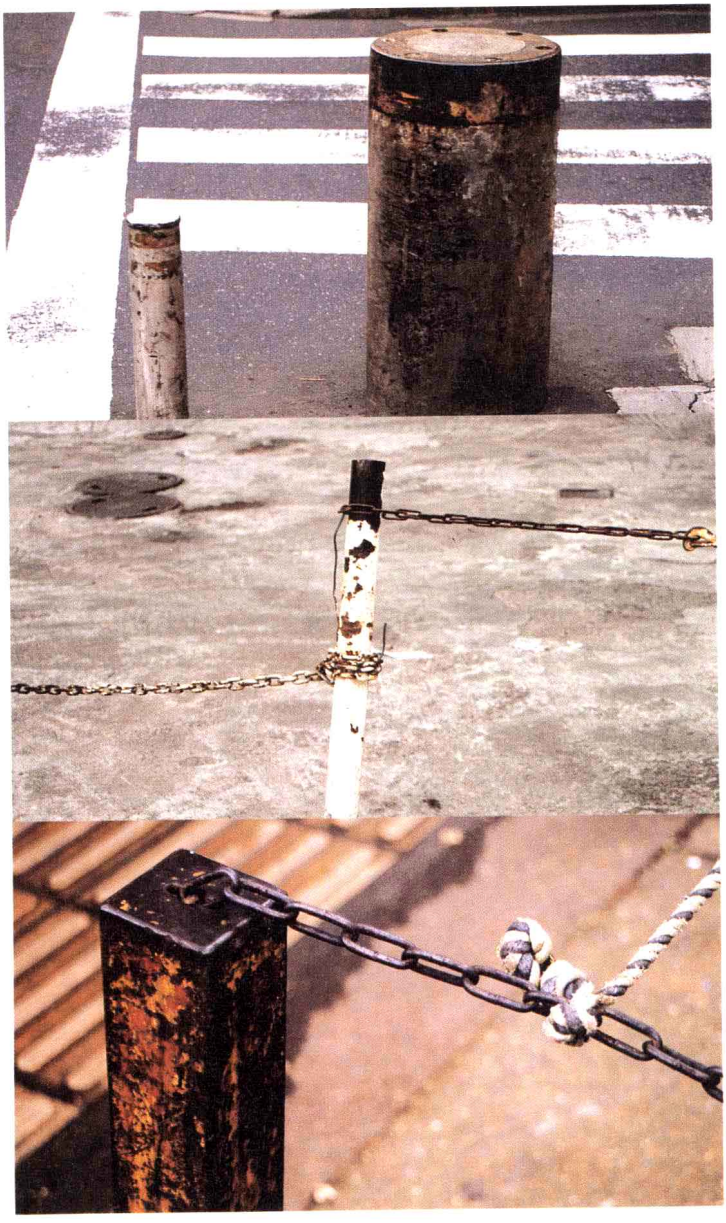
© 1992 YUTAKA OZAKI Printed in Japan
ISBN 4-04-871351-5　C0092

白紙の散乱

更多精彩图书请扫描或请访问：www.ertongbook.com

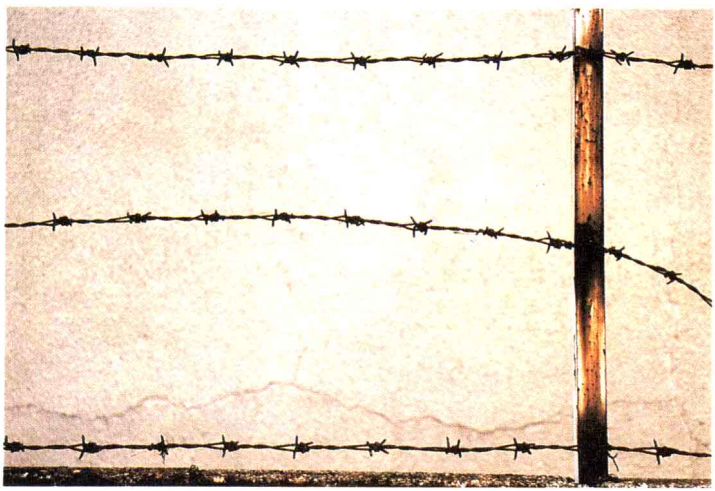
風の虚構

疲れているのか　ひと吹きの風に　意識を奪われ　倒れそうになる
首をかしげてみせる　優しさよ
脅えていたはずの　君の瞳の中のその僕が　もう倒れて消えてしまう
閃光の意味も　見つけられずに
求める者の　その訳など　誰が語るというのだ
泣く者の　その悲しみなど　誰に拭えるというのだ
疲れているのか　このひと吹きの風のような　意識のくらめきよ
倒れるように　僕は羽ばたく
無頓着な　純粋さが　ひと吹きの風のような　風の虚構



幾つかの透明な壁

誰かが壁を蹴っているから　上手に眠れない
誰かが壁を叩いているから　深く眠れない
誰かが結んだ透明な壁が　眠りを妨げている
路上にこぼれ落ちている　言葉の幾つかを拾って
風が囁いている　悲しみに耳を澄ましそう
闇に吠えている　僕だけの悲しみよ
意識を妨げていると　どんな気持ちがするんだい
勝利かい　でもそれはただの虚栄だろ
そうするより他にやり方が見つからないんだね
邪魔するものの意味を探して　いくら我慢したところで
そこに正しさがあるわけじゃない
それは競争の様に空しく　存在そのものすら虚しい
ただ今夜　壁を　透明な壁を　くぐり抜けようとしている
上手く眠れなくて



君に会えたら

強い信念のある君だから 優しさなんて言葉じゃないと 笑い飛ばしてしまおうか
研ぎ澄まされた瞳は 悲しみが深く 強がって 泣き尽くした様
僕はなんだか知らないが 涙が急にこみあげて 傍らで君は知らぬ振り
君が風なら 僕は一本の樹木になって その訳を聞こうじゃないか
君が光なら 僕は空の青さになって その輝きを知ろうじゃないか
もし君に会えたら 僕はなるべく恥ずかしがらずに
思いの全てを 言葉にして伝えたい
そんなあたりまえの事が出来ない 僕なのだから

目を閉じていると

あぁ目を閉じていると　深い暗闇から逃れられないまま　諦めちまいそうだ
あぁ目を閉じたまま　俺は思想を抹殺しちまうんだ
あんなに思いつめたんだから　思い残すこともないその時が来たら
ありふれた言葉でも探してさ　いい思いするんだ
思い悩んで何になった　何の足しになるって言うんだ
あぁそう言えば　俺はそこで思い知らされたんだっけな
弱さと無力さ故に　夢に理解のない人々の独りよがりの強がりを
今さら　未だに　待っているよ　あんな所に独りぼっちじゃ　寒かろうね
あぁもう目を閉じて　どうにもならないって　泣いちまおうか
あぁだからもう　目を閉じたほうがいい
俺もあんたも　どいつもこいつも　いつも何かを殺してるんだ

幻影が僕に

真っ逆様に落ちて行く時に　僕は見たんだ　優しさひとつも持てない自分を
鉄の咲き乱れる柵の中で　棘に瞳を隠してさ　何に腹をたて　何を待ってるんだ
知っているそいつを見逃してやろうよ　どうせ同じ穴のむじな　哀れむ理由もない
ただ脅えてただけなんだ　忘れちまおうよ
楽になりたいんだ　探してるものなんか　もうないから
幻影が僕に　なんだかとっても寂しくて
原形も見たことないんだから　分かるはずないだろ
僕があそこに追いつめられて　あんな風にさらされて　あんな所に立たされて
何を言えって言われても
嘘ついたって　本当の事言ったって
別に世界が平和になって　明日が見つかるわけないじゃないか
ただ　僕は思う　僕が不幸になることを　誰かが待っているように
世界は力と権力に支えられたまま　弱者は平和を奪われてゆくだけ
本当にそうなんだから　不幸に耳を塞ぎ　目を隠せ
そしたら　少しは　マトモだった自分を思い出して　笑っていられる
幻影が僕に　触るなって言ってるんだよ

冷影の群れ

歪んだ姿を見るがよい　それがいかなるものかを知るために
触れてみるがいい　己の形を確かめるが如く　畏怖の面もちで戸惑いながらも
おまえは探しもしない　おまえは触れもしない
だがおまえは知っている
探す者は虐げられ　何故探そうとするのかその訳を知ることは出来はしないと
だが固く群れを成す俺たちの合間の　わずかな水の恵みの冷影は　透過するが如く
集う俺たちの偽り無き自然への合唱
それぞれのふぞろいな群れのはざまに映る　歪んだ姿を見るがよい
探し続ける悲しみの隷(もの)よ　己の心に哀れみがあるならば　その美しさを知るがよい
哀れみに浸される　悲しみの友よ
全てのものが　歪んでいることを確かめよ

この向こうに

この向こうに君がいる
どんな姿でいるのかは分からないが　僕を待っているはずだ
この向こうに君がいる

どんな都合があるのかは分からないが　僕を待っているはずだ
愚かな者が振り返り　弱さを笑いとばしたが　気にはするまい
何故なら僕は行かねばならないのだ
幼い頃　平和を願い続けた
今では　犯した罪だけが唸り続けている
教えられた善行の全ては過ぎ去った　全ての人々に残されていたものは諦めなのか
この向こうにいる君に会いたくて　僕は這いつくばってでもそこに行く
たとえもし君がいなくなっていたとしても
だって　この向こうに君がいる

高清完整PDF请访问：www.ertongbook.